

## 古典古代に於ける農耕的と商工的（下）

宮本，又次

<https://doi.org/10.15017/4355423>

---

出版情報：経済學研究. 18 (1), pp.33-56, 1952-04-30. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：



# 古典古代に於ける農耕的と商工的(下)

宮 本 又 次

## 四、ギリシヤ本土に於ける農耕的と商工的

永らくギリシヤ文化の指導者の地位はイオニアが占め、本土はその後塵を拜するにすぎなかつたが、そのイオニア的な都市文化はギリシヤ本土に逆輸入され、幾多の影響を与えたのであつた。ポリスの都市の形成はイオニアがまず本土に先つてなした所であるが、これが本土に伝えられたのである。イオニアの貨幣経済は本土にも浸潤して来た。イオニアに局限されていた奴隷経済も母国に伝えられ、まず、それはサロニカ湾の工業地帯にもひろがつた。農耕的・内陸的・村落のギリシヤ本土に対し、いまや商工的・海洋的・都市的な要素が加わつて来た。まことに地位はラツチェルの云いし如く最も豊かなる地理的概念でなければならぬ。東方と西洋との接触点に位置しているギリシヤ、このことは重要でなければならぬ。小民族が歴史的に重要性を持ち、大民族が歴史的に重要性を有せず、無価値に等しいことは常に位置が空間よりも優越せることの表現である。東方をうけ、イオニアをうけて、ギリシヤ本土は商業的要素を添加され、変化する。征服

者と被征服者のところへ商業民がはいつて来たのだ。リクルグス時代以来地中海の諸島や東海岸のイオニアの植民地から商業をなすべく多くの人々が来航し、後には本土に定住する。貨幣の導入は交易を促進する。部族体制の上に立つギリシヤ、征服者と被征服者からなるギリシヤ、そこへ新来の商業者が加わつて来る。社会的分業の発達となる。(Giddings, *Principles of Sociology*, P. 318. Gumplovitz, *Grundriss der Soziologie*, S. 210. ff.)

しかしイオニアがギリシヤ本土に与えた影響はどこでも同じではなかつた。それは大別して三つに區別することが出来るであらう。

第一の型は、中部ギリシヤ及びペロポネツス半島の多くの地方で、その影響は稀薄で、農耕文化は根本的に変革されず、そのために時代の落伍者たらざるを得なかつた。

第二の型はコリント地峡の商業都市であつて、コリント、エギナに於て類型化される。コリントスはスパルタと同じドーリス人のポリスでありながら、その地理的地位によつて商工業が早くから盛んであつた。ヘロドトスここでは手工業者の蔑視されることが最も少なかつたといつてゐる。しかしそれはあまりにもイオニア化しすぎていた。そのためイオニアと共に天折する運命を持たざるを得なかつたのである。

第三の型はアテナイ (Athenae) をもつて代表される型で、それは農民と商人との中間にあり、そのために最も永く栄えることが出来たのである。その存立は深き郷土の農耕的地盤に根差しつつ、しかも他方に於てその活動は広い自由な空氣を呼吸して伸張していた。ペルシヤ戦争に大功をたてたのも、ギリシヤ文化の貴族時代をきすいたのもこのためであつ

た。

第三の型は農耕的と商工的の矛盾調和に、海洋的と内陸的、村落的と都市的の止揚の上に立つていた。そこに健全性があつたともいえる。農業祭たるディオニシアも一度ポリスに入れば、都市的に行われるに至る。デーモスは正にポリスとしての国家形体をとつたのである。物酔かに落ちついていて粘着力にとみ、敬虔なる農民思想の地盤を失うことなく、しかも理性にかがやく豁達清明のイオニア思想をふこやかに摂取し得たところのアテナイの偉大さがあつたといわねばなるまゝ。

魔術的な祭祀、神話と伝説の段階、古きギリシヤの神話の示す奇蹟は人間の非合理性が生み出した所産であつた。所がイオニアを知り、イオニアの唯物思想がはいつてくると、もはや神話は畏怖さるべきものではなく、たゞ一種の芸術的創造物として客観視されるのみ、信仰の対象とも驚異の目的でもなくなつた。実在が重んぜられ、人間が考慮される。ギリシヤの文化は自然を実在として花咲いているが、人間性を忘れてはいない。それは單なる自然主義でも單なる人間主義でもない。自然と人間、精神と肉体、靈肉の一致である。農耕的と商工的、内陸的と海洋的、矛盾調和は、ここにも見られる。神々が極めて人間的に描き出されてくる、ポリス社会の姿は正にここにあつたわけだ。

そもそもアツチカ (Attica) 地方の人々は谷々や平野に部落をなして居住していた農耕民であつた。行政がアテナイ (Atheneae) の町にて行われる様になつても、人々はまずその村落にとどまり、農民にふさわしい固定性と伝統性をもちつづけた。ギリシヤ本土のポリスはイオニアのポリスの影響下になつたものではあるが、アテネはそれなりに集住の原理

をもつていた。アテネはもと緩い結合をなしていた十二ヶ村が、伝說的英雄テセウスによつて集住(Synoikismos)せしめられたといわれている。ギリシヤ語でアテナイと複数になつてゐるのはアテネが十二の個別的村落からなつてゐたためである。しかしそこには共同体の弛緩になる貴族の成立が作用してゐる。既にして牧は農に代り、家畜は高く、公衆は肉食よりも穀食をとる。農地は割当地クレロス(Kleros)を主としていたが、いまや荒蕪地の開墾が熾烈に要求され、留保地エシアテ(eschatie)が分割された。有力なる族長は良地を先占し、小農は惡地をとり、墾田は有力なるものの外はなし得ない。小農は私有地の細分になやまされ、既に波及せる貨幣經濟にまきこまれる、小農にして転落し、あるいは債務奴隸になるものがあり、大地主は貴族として自ら労働せず、集住によつて形成せる都市に入つて参政権を持つに至る。貴族の耕地を耕したのは、スパルタ型のポリス以外では、奴隸又は日傭取(ericho)であつた。貴族に対し周囲の住民は何等参政権をもたず、貴族支配が成立した。前七五〇年に王政が廢せられた。大貴族アレオパクスAreopagus会が政權をにぎり、九人の長者アルコン archon を選んで、行政・司法・軍事・祭祀を執行させた。大土地所有者は騎士として戦争の主力をなすが、このため自ら武装する能力のない小農民を政權から排除してしまふ。

しかもアツチカの農民はいつまでも、そのままで停滞しない。その土地の收穫が充分でなかつたので、より多くの報酬を約束するような植民に目をつけ初めた。オリーブの樹やブドー樹がまさにこれであつた。これは岩勝の地にもよく栽培された。しかもそれは輸出をめざして栽培された。勿論それともアツチカ自身の農民の手では行われなかつた。当初はフェニキヤの商人が、これをなし、つづいてイオニアの商人がこれをなした。イオニアの商人はアツチカの港に来て、彼

等の到来品とアツチカの土産物とを交易せんとした。イオニアとの交渉はアテナイの町を發展せしめ、陶器工業が發達した時、その職人達は一ヶ所に集まり、アクロポリスの西北の麓に陶器工業地帯を形成したのであつた。イオニア的都市の色彩が加わつてくる。イオニアの航海者や商人との交渉は活潑さを加え、前七世紀のアテナイ人の歴史はそのイオニア化であつたといつても過言ではない。イオニアから貨幣がはいつたことも特筆すべきである。初め家蓄、特に牛が実物貨幣として奴隷や武器の評価に用いられたギリシヤであつたが、前六五〇年頃から、金屬貨幣が使用され初める。最初は名譽の表象として鑄造されたにすぎぬが、流通界にあらわれ、その計算によつて商業交易がますます盛んとなる。また貨幣は土地を抵当とする貸附を容易にする。農民が返済し得ぬ場合、土地のみならず、身体をもこれにささげて隷屬せしめる。隷屬化と窮乏化、血縁的な民族的結合を破つて地縁的な人工的政治的結合を現出せしめる。ポリスはかくてはつきりと浮び上る。

イオニアの影響はその外にも多い。イオニア的風習や文化が出来上る。都市的・商工的・海洋的とに転化したアテナイ人は本土の人であると共に、また人種的にはイオニア人でもあつた。人口が増加し、欲望がますます自分の国の上だけでは足らず、穀物をもとめて外国からの輸入をあらうごうとし、海外に出むいて行く。その海運もそれを可能にするだけ充分なものになつて来る。勿論初めは、撓航も不恰好で、錨は重い石を用いたが、やがて今日一般に見るような器具となつた。帆も古くからあつたが、ただ順風の時に船を漕ぐ補助として使われ、方向定立用の器具も原始的で、航海は沿岸航路より上には出なかつたが、しかも五十人の漕手の船が前七世紀にはつくられていたし、既に三段櫂の撓船があつた。

航海のある程度の發達はあつたと見ねばなるまい。かくてアテナイ人は少なからず海上貿易をするに至つた。ターレスもヒポクラテスも商業に従事したし、プラトーンすらもその旅行費を油商売で儲けたのである。

しかしながらアツチカに於て都市生活に与つたのは、全体から云つて人口の僅かな部分にすぎなかつた。大多数は久しくなお農村にとどまり村落的な生活をなしていた。だからアテナイ人はその固有の農民意識を失いつくしてはいなかつたのである。これはアテナイの地形を見れば容易に了解され得るであらう。殆んど四方山々をもつて囲まれ、外界との交渉をたたれている点に於ては、他の農業都市と異なる所がなかつた。高地の傾斜には家屋がつくられ、その谷の土地を耕作した。各部落・部落は山々によつて距てられ、あまり関心をもたなかつた。王の古き居城たるアクロポリスに接して作られたアテナイも、もとはこの様な村落の一つにすぎなかつた。アクロポリスに於ける太古時代に發する礼拝もまつたく農耕的性質のものであつた。オリープの神であり、国の主護神であるアテネのためのパンアテーナイアー祭(Panathenalia)にしても、豊穰とブドーの神ディオニュソス(Dionysos)のためのディオニシアにしても、元來農業祭であつた。牧畜を主とする民衆はその崇拜する靈物を山羊・羊・馬の形又は人身牧獸顔にて形をあらわす。農耕を主とする民衆はその崇拜する靈格をしはしば牛形又は牛頭人身に表象する。ディオニュソスは牡牛を犂につけた最初のものとつたえられ、牛の角をはやし牛形の靈物に外ならない。ディオニュソスはトラキヤから移されたものであるが、こうした農耕祭礼をもつアテネが本来、農本的であつたことは云うまでもない。

当初は諸部族が結合し、集住を行つて、アテナイがこの地方の首となつたのである。個々の部落の役所がここに集めら

れた。しかもそれはアジア的な東方古代の都市の如く單なる軍營の地でも防禦の地でも、官廷の所在地でもなかつた。それは農耕者のよるべき中心であり農耕者のたよるべきところであつた。それはたとえ軍事的指揮の中心としての性質があつたにしても、既にそれは『市民なき都市』ではなく、『市民ある都市』になつていた。耕地は村落としてでなく、いまや都市の領域としてあるに至る。a city with its territory の成立である。この点も東方古代と対照的であらう。東方では王の武器庫より出せる武器で、王により給養せられる士官と兵士とが軍制の基礎となり、兵士と戰爭手段とが分離していた。かくて一般臣下の無防禦が生れる。かかる地盤に於ては王權に對し、獨立の市民共同体が生れない。東洋的治水の上に立つ官僚政治には、国家により給養される軍隊はあつても、被支配者には自衛力がない。ところがギリシヤでは、戰士が市民であり、市民が戰士となつてゐる。武器自弁の戰士である、重装兵民主制 Hoplite democracy といわれる所以である。

しかしながらたとえ外界との交渉をたれた地勢の下にあつても、一度アクロポリスに登れば、眼界とみに開け、南方に海の輝きを望見し得るのである。それは海洋へ志向すべき地形であつた。商工化の契機をふくんでいたと見ねばなるまい。アテナイはすでに地理的にいつて二重であつたわけだ。農耕的と商工的、村落的と都市的、ここにアテナイの本然の姿があつたわけである。云わばアツチカはイオニア風とドーリア風の混合融合の地なのであつた。ペルシヤによつてイオニアが征服されて後、アツチカこそ文化の花咲く中心となり、イオニア、ドーリア両文化の授取配分はあでやかな婚禮の祭典をあげ、クラシツク文化の絢爛たるものを現出したのであつた。

ギリシヤがコリント灣で南北二つの部分に分れていたことも、而もこれが東端で狭い地峡にて結びついていたことも重大でなければならぬ。

ペロポネソス半島がペロプスの島という意味である様に、南の部分はまったく島嶼的性格を有していた。しかももし地峡でなく本島の島であつたとしたならばどうであらうか。

その時にはエーゲ海とイオニア海とは直接に連絡し、両海の間は交通はもつともつと早くから頻繁に行われていたであらう。商人は南端を迂廻せず、中央を横ぎつて進み來つたであらう。その場合は商業路も商業中心もまづたく變つたであらう。東洋と西洋との接觸はもつと速やかであつたらう。アテネ、そしてギリシヤに於ける農耕的より商工的への移り來りが、極めて緩慢であり、農耕的なものをいつまでもこした所以も、つまりはこの地形に秘密の鍵があつたのである。

ここでわれわれはアテナイと対照的なスパルタに一瞥を加えねばならない。

スパルタはペロポネソス半島のラコニア地方に侵入したドーリア人が建設した都市であつた。スパルタも亦貴族主義をとつたが、その移動以來永い戦争をくりかえし、激しい斗争をくりかえした。彼等は征服した土地を分割して所有し、被征服者を奴隸として労働せしめた。いずれもスパルタの町にすみ、彼等は労働から解放され、貴族として生活した。スパルタはかくて軍營の町となり、軍事的教練が貴族たるスパルタ人の主なる仕事となつた。彼等はまづたく軍隊的生活をなし、不在地主となつた。貴族としてのスパルタの市民は数少なく、武装した男子は一人に足りなかつた。スパルタ人全

体でも二万五千といわれ、これが数多き先住民、アカイア人を抑え、幾倍かの奴隷を支配せねばならなかつた。このため  
団結と訓練とが必要であつた。金錢を愛することを罪惡とし、商業貿易を禁じ、殊更に不便なる鉄貨を使用さえたので  
ある。貯蓄そのものは価値なしとし、何人も富者たることを望まぬ様になつた。男子は生れて満七才に達すると母の膝下  
を離れて国家の訓育所に入れられた、十二ヶ年間身心の錬磨をなした。共同食事が行われ、十五人を一組として同じ天幕  
の下で食事をした。一種の食糧共產主義で、古くはクレタ人にもあり、同族制のなごりであろうが、これがスパルタでは  
行われた。彼等は組 (*enomotia*) に属し、*lochus, mora* の分団に属した。二十才に達すれば兵士となり、三十才にし  
て成年として民会に列し、官職についたが、成年になつてもその食事は公食団にてとつた。共同食事 *phaiditia* は最も特  
徴的であつた。戦士の勇氣と名譽とがスパルタに於ける行動のもつとも力強い動力であつた。前八世紀頃からこの傾向が  
ますます強くなり、国家が一切を統制した。リュクルゴスの制度 (前八二〇年) はこれを固定せしめた。市民とは不可分に  
して、譲渡し得ない割当地クレーロス *Kleoros, klaros* の所有者であり、クレーロスは市民権の保証であり、生活の保証  
でもあつた。クレーロスは売買・贈与を許されなかつたばかりでなく、分割相続すらも認められていなかつた。この特異  
なる制度は、前五世紀まで続いた。彼等はクレーロスの收穫によつて生活の顧慮をする必要がなかつた代りに、専ら国事  
と軍事にはげむ義務があつたのである。家庭生活を許さず、一家が財産を私有することを禁じ、父は子の教育について何  
の権利をもたず、全く全人をポリスにささげていた。

労働はヘロット *Heilot* なる一種の国有奴隷のなす所であつた。ヘロットは国家に附属して個人に分配された奴隷で

(Slaves of the State)、換言せばクレイロスに附属せる農奴であつた。彼等は各々その主人を持ち、それから逃れることができない。ただ主人の権利は制限されていたから、この限りに於てヘロットは農奴であり、国家の権力は制限されなかつたから、この点からは奴隷であつた。ヘロットはクレイロスを耕して、地主なるスパルタ人に毎年大表七〇メデイムノス (medimi) その妻に十二メデイムノス (合せて一五六ブツセル) と一定の酒と油とを納める義務があつた。(約六六〇ガロンの酒) 戦時には主人について従軍せねばならなかつた。ヘロットはスパルタ市民(貴族) に対し、十倍に達し、戦の際にはスパルタ人一人につき七人が従つたと伝えられる。

スパルタには、またペリオイコイ (ペリオキー) (Perioeki, Perioicoi) なるものがいた。彼等も亦ヘロットと同じく先住民ではあるが、辺境の瘠地にあつて僅かに自由を与えられていた程度であつた。その数はスパルタ人の四倍に上り、いわば附属民であつた。ペリオイコイはヘロットより幾分幸福なる生活をしていたし、スパルタ人の朝貢者であつた。ペリオイコイは軍務にも服したが、市民権をもたなかつたものである。ところがスパルタ人が全く労働をしないので、ペリオイコイは町々で種々の職業をいとなみ、商工業をなし、金持になるものもあつた。しかしながら自足を主眼とし、交易を禁じ、外人の在留を阻止したスパルタに商工業が発達するはずがなかつた。その上スパルタは商業路からはずれてした。

こうしたスパルタに対し、アテナイは正に農耕的にして商工的であり、この限りに於ても榮光はアテナイのものであつたのだ。

農民は平和を欲する。しかし商工は市場の獲得のため戦いをも辞せない。両者が均衡を得た時、ポリスは健全であり得た。而もこの均衡はともすれば破られ勝であり、動搖はジグザグの道を進ませる。

商工業が発達すると個人が自己の財産を大にする可能性を大にした。かくて貧富の懸隔はまし、鑄造された貨幣の流入は小農の生活を圧迫する。古い家長的関係が亡び、身分間の斗争が激化する。この頃になると騎士となり得るものは何も貴族のみに限られない。ギリシヤ民主制の第一歩は重装兵民主制 Hoplien demokratie であつた。この段階では原則として重装兵となり得るものだけが共同体の成員であつた。所が商工によつて富をなすものが出来るし、手工業の發達は武器を安価にした。安価なる武器を入手して中小地主農民も、商人も、たとえ馬は買えずとも、重装歩兵 (Hoplites) として戰場に出る。戦車と馬によるホーマー的貴族はもはや重要性を減じ、甲冑が主たる兵器となり、騎士、戦車よりも歩兵が重要な役割をなす。フアラックス (Phalax) 歩兵密集部隊が戦列に加わる。平民・庶民が国防に参加する以上、その参政を拒み得ない。彼等も政治に發言権をもち、それを無視出来ない。とりわけ海軍の發達がある。大衆の力に代つて大船が力をもつが、その乗組員は全く無産なる、土地なき人々であつた。かくて民主制は土地の所有者から全市民の手にうつらねばならぬ。

かくてドラコン Drakon の成文法 (前六一二) 、ソロン Solon の改革 (前五九四) がなつたのである。ソロンがアルコン (archon) として仲裁者選ばれたのは、庶民の要求からであつた。アルコンは王に代つて貴族会から選ばれた執政官であつた。まことにソロンは農耕を基礎とする社会が商工を基礎とする社会へ移る過渡期を代表する人物であつ

た。社会の改革を委任されたソロンは貴族の出身であり、同時に商業に従事していたので、この適任者として信任を得たのであつた。庶民の向上、その軍事的政治的地位の向上、これはかつて貴族社会の客観的法規たりしテミス (Themis) に対し、弱きものの権利の保護者たる正義の女神ダイケー (Dike) の役割を強調し、両者の融和または均衡の間に具体的な制定法テスモス (Thesmos) を見、理念的な国法の権威ノモス (Nomos) を感得せんとしたものである。具体的な事実に即して理念的形姿をみるというギリシヤ的国家観の結実である。要するにソロンの改革は貴族派と民主派のバランスを中庸と節度の精神によつて融和・調停せんとしたものに外ならぬ。

ソロン立法の眼目は二点に於て見られた。一は救農法であり、二は金力政治である。

第一に救農法であるが、既にして貴族に隷屬し、收穫の六分の五を支払う小作人たる農民ヘクテモロイと身をもつて借金し、遂にはこの世の中でも『もつとも苦しく最も痛わしき』奴隷となつた人々の解放は緊急の問題であつた。つまり當時の対立は土地所有者と土地のないものとの対立であり、都市的債権者と農民的債務者の対立なのであつた。ソロンの改革は債権者を抑え、債務者の利便をはかつたものだ。即ちソロンは貴族の過大なる土地を没收し、私有地の限度を定め、あるいは穀物の輸出を禁じて、その価の騰貴を防ぎ、悲惨なるヘクテモロイ及び奴隷を解放し、身体を質として借財することを禁じ、また断乎として負債放免令を出し、公私一切の負債を帳消しとした。そして他国に売られたものは購がなわれ、債務奴隷は土地を与えられ、自由農民となつた。これからは族外奴隷 extratribal slave のみとなつて、族内奴隷 intratribal slave がなくなる。高い利子率が禁止され、土地所有の許される上限が決定され、それによつて土地の累積

が禁止された。しかもまた貴族の土地所有は保護されねばならぬ。だから下層民は貴族と同様に土地の分割に与るべきでないとされていた。ソロンのそれとても先のドラコンや後のクライステネス (Cleisthenes) のそれと同様に、所詮は妥協であり、調停なのであつた。農民に対し負債奴隷の廃棄、土地負債の排除、更には負債の全面的免除、土地の新分配にまで進んだにしても、ソロンの改革はやはり、農業的關係に於て保守的だつたのである。

営利と貨幣とが身分分化の所以であり、家長父的貴族よりも擡頭せる商工的貨幣貴族が高い利子で投資せんとし、この対象物を土地に見出したのだ。ここに貸附をなし、その農民は小作人として生産物の六分の五を提供せざるを得ず、これが必然的に自由農民を困難にしたのである。こうした事情を改革者も農民も悟ることが出来なかつた。かくて農業部面では保守的妥協に終り、他方商工部面に於て、寧ろ改新的処置がとられたのである。

第二は金力政治 Timocracy, Timokratia 財産評価政体であらう。これはアツチカの住民を貴族平民の別なく財産の多寡によつて四十の級に分ち、階級に應じて事務及び官職につく資格を与えたものである。

第一級ペンタコシオメデムノイは自己の所有地から五百樽以上(樽とは固形物で、約三斗液体で約二斗一升)の收穫あるもので、九人のアルコン、アクロポリスのアテネ神殿の財務官などであつた。騎士級である。

第二級はヒツペイスで、矢張騎士級であるが、三百樽以上の収入のものであつた。

第三級はゼウギタイ、農民級で、収入二百樽以上のもの、重装兵として出征した。

第四級はテテスで、労働者級、収入二百樽以下のものであつた。彼等は水夫となるか、歩兵として出征した。

これにより自ら武装し得る総べての土地所有者は市民権を得、官職につくことが出来た。たゞ土地所有の大小に応じて参加し得る官職の差があつたにすぎぬ。あらゆる市民に同等に妥当する法律が編纂された。貴族の貴族としての政治的特権が失われ、ただその所得に応じて市民に権利が与えられたのである。ローマに於けるセルヴィウス・トゥルリウスの改革に通ずるものがある様だ。第三級までが国家の役人たるの地位を占め、第四級は民会と陪審裁判に参与し得るのみであつたが、それでも民意公平が顧慮されたことは驚くべきであつた。

その外、貨幣金位が他の負債の弁償を容易にするために切り下げられ、度量衡が定められ、産業が振興された。ソロンは又、これまでドラコン法の罰金が家畜であつたのを本当の罰金になおしている。即ち羊一匹を一ドラクメに、牛を五ドラクメに換算している。物品貨幣から鑄造貨幣への切りかえはこうした方面に於てもなされているのである。

要するにソロンの改革は一方土地所有者を保護し、凡ての農民を土地に結びつけておこうとしたが、他方では貨幣経済に革新的であり、商工を促進させようとしていた。貨幣制度の改革によつてイオニア的世界と結合せんとしているのである。各人が同等の権利を有する民衆議会が主権を握つたのである。

しかしここにも秘密があつた。事実上、小農は都市に於て彼等の政治的権利を行使するために、その耕作地帯から離れることが出来ない。これはつまり都市の住民のみを利することとなる。公の機関は陶器地帯に移されたが、このことはなにごとにもアテナイの重心があつたかを示すものである。ここにその実、商工的に志向するソロンの改革の本然の姿があつたのである。

それにも拘らず、ソロンはなお土地を神聖なるものとし、それが借金を負わされることは冒瀆であるとした。保守的と進歩的、ここにも思想の両面性がうかがわれるではないか。かくて、節度を思い、中庸を尊び、勤労的な志向をもつギリシヤの強みがあつたのだ。商工的・都市的となり、個人主義的となつても他面これがために彼等の固有なる農民意識が失われたわけではないのだ。そのイオニア化に対しては常に激しき否定の声があげられていた。この軋轢・葛藤は断ゆることなくつづいたのである。

ソロンの法律はやがてギリシヤの各都市に於て採用されたから、アテネの傾向はそのまゝ大なり小なり、ギリシヤ一般の傾向であつたわけである。ギリシヤに於てイオニア化の影響の痕跡をとめていないものはほとんどないといつてもよい。勿論中部やペロポネソスの国々ではなお執拗に農業的なものが保たれていたにしてもである。とりわけコリントス地峡の国々は早くから国内的覇権をだつして、殆んど純粹なる商業国家になつていたのである。

## 五、ポリス社会に於ける商工の優位と奴隸制

ソロンの改革が農耕的と商工的の矛盾調和の上に立つていたことは前にのべし通りである。しかしこの均衡には常に破綻の危機がひそんでいた。あまりにも中庸すぎて、貴族・平民の利害を秤にかけていた。ソロンの Timocracy には貴族も平民も不満であつた。双方の失望。かくて彼は野に下らざるを得ない。土地を所有せざる商工は小農民と結んで土地所有の貴族と抗争し、ついに僭主政治をもつてこれに代えた。混乱に乗じたピシストラトス (Pisistratus) が平民と結ん

で、武力をもつて僭主政治(前五六一—五二〇)を樹立したのだ。この僭主制によつてアテナイは先進イオニアの諸市に比肩し得る経済的文化都市に躍進した。アテナはその局限された地方的存在から脱した。

このピストラツスは山地党を引きいて僭主となつたもので、彼は商工をすすめ、海外発展をさくし、法を守らぬ貴族の財産を没收し、土地なきものに分配し、鉞山を国有財産に移し、広大なる公共建造物をたて、水道をひき、アテナの街を一新した。いわばアテナの都市的發達のために努力したのであつた。僭主チランノスなる言葉は、元来イオニアに於て生れたものであつて、外来語であつた。頭主バシレウス、君主デスポスと同じく全支配を意味した。これは貴族にして民衆に味方し、その後援によつて非常手段をもつて都市の支配を篡奪したものを云うが、ピストラツスの政治は割合に穩健であつた。彼は国内的確執に尽されていた力を外部に向けんとし、商業植民に力をそそいだ。土地を開墾して回收をはかり、海外植民を奨励しては、その貿易に基く関税を得、又物産の十分の一税をとつて国家の財源とした。

ピストラツスの僭主の頃アポロの信仰がアツチカの国内に於て盛んになつたことは注目しなければならない。元来シリアの女神であつた *Astarte* がギリシヤ人によつて *Aphrodite urania* として崇められたのである。本来外来神たるアポロが氏族の神となり得たこと自身氏族制の弛緩を物語っている。それが他の神でなくアポロなる海上神であり、これがいまや氏神として、ゼウス *Zeus* と並んで、重大なる地位を占めていたことは商工的・海洋的方面へのまつたき転化を示すものに外ならない。

前述の如くソロンの改革は商工・農耕、海洋と内陸の均衡の上に立つていた。ソロンは一面では商工をのびし、他面で

は商工をおさえていた。そこで貨幣的商工的優位者はその利潤追求の方途を変えなければならなかつた。彼等は最早国内の自由市民の犠牲によつて、その富を増殖することをやめた。そしてその致富の行為をひたすらに外国貿易に向けた。そしてそれと共に奴隷を使用する農業や工場手工場たる職場に向つた。いまや搾取されるものは外国人であり、又奴隷であつた。かくて植民へ、貿易へ、方途は進んだ。

僭主制はアテネだけでなく、多くのポリスに於て現出した。しかもこれにはタイラント暴君制の色彩が濃くあつた。そこでクリステネス (Cleisthenes, Klisthenes) が民衆の指導者となり、古代的デモクラシーを確立するに至つた。当時全市民による独裁者となる嫌疑ある人物を追放する投票を陶片追放 (Ostrakismos) といつた。クリステネスの革命 (前五〇九) によつて部族同盟なる氏族制の最後の遺物が打ち倒された。この変革によつて全アツチカは百個のデモスなる自治的行政区に区分され、デモス (区) に住する者を区民とし、今後人々は自己の名前をよぶにいままでの様に氏族名と父の名を自己の名に附することをやめ、自己の属するデモスの名をつけた。その市民デモテスは首長、デマルコス、裁判官、会計官を選挙し、デモテスの集會が最高の権力機関となつた。国政に於て最高の決定権を握つたものは役人でなくて全市民の總會たる民会 *ekklesia* だつたのだ。市民の形成せる民衆裁判所 *Heliaia* が役人の不正を防止する役目をなした。

十個のデモスが一つの部族を形成し、自治的政治關係としてばかりでなく、軍事団体としてアテネ国家の直接の腕力を構成した。アテネ都市国家は十部族から選挙される五〇〇人の議員による評議會によつて、またこれに投票権と出席権を有するアテネ市民によつて統治されるようになった。従来のアテネには四つの部族があつたが、今回はこれに代つて十の

部族が成立した。アツチカ全土を都市・海岸・内地の三部に分ち、そのおのおのを十トリツチュエスに区分した。この三部分からそれぞれ一つづつ三つのトリツチュエスを抽籤し、これを組合せて一部族とせるものである。これは名は部族ではあるが、古の氏族とは全く関係のない機械的結合であつた。血縁的なものはあとをたち、奴隸や移住者の子孫も新たに市民に編入されるに至り、人民の政治上の平等が達成された。職業としての官職はなく、市民即為政者で、だれでも役人に就任出来た。治者と被治者の区別を生ぜしめなため、役人は原則として任期一年で重任を許されなかつた。かくて古代デモクラシーのアテネが完成したのである。

貨幣經濟や商業はギリシヤの社會經濟情勢に大いなる変革をもたらした。前述せる前七一六世紀にかけての社會的危機は正にそのプロセスであり、貴族制はその末路にはいつたのである。古き家長制がゆるみ、農民が零落し、所謂古代資本主義が花さいてくる。商工の發達によつて商人貴族が生れ、彼等は農民と結んで貴族文化をゆすぶる。

クリステネスの改革はソロンの改革の延長であつたとも見られよう。私有財産が確立され、これをアテネ都市國家の共同體名簿に登録し、政治的權利は居住地によつて与えられることになつた。財産の多少によつて兵役の義務が課せられ、防禦は市民の義務となつた。國家收入は主として賃貸鉞山の利益、罰金、居留民の人头税、関税、同盟都市税、國家による賦役よりなつた。しかし市民一般には直接税がなく、ただ富裕市民には財産税があり、劇上演の費用や海軍の維持費はその負担であつた。かくて富裕市民は寧ろ反戰的となる。これに対し大衆は好戰的となる。なぜかといへば大衆は戰爭利得を得、占領地に於ける移民 *Kleruchia* (*kleros* の分配) が出来たからである。ここにも利害の対立があつたわけだ。

それよりも最も大きな対照は労働せぬもの、労働蔑視と、労働するものの自己無力感であつた。かつてホメロス時代のギリシヤではまだ氏族成員は生産に従事すべきものとされ、労働が尊ばれ、軽視されていなかつた。頭主さえもその家畜を見張ることを恥とせず、喜んで農耕をしたことはアキレスの楯の物語からでも判らう。しかしこの時代になると貨幣貴族は非労働によつて自己の地位を示さんとし、労働から出来るだけ離れようとする。又本来の血統による貴族は自己の富はないが、なるべく肉体的労働から解放されていることによつて下層民との距離を引きはなさんとした。ここに労働蔑視の思想が生れた。

ソロン以来の改革によつて市民は皆、政治に参加出来るようになった。しかし経済的労働から離れているものでなければ、實際上政治に参加する余裕がなかつた。労働から離れているもののみが、市民たり得た所以なのであつた。労働するいわゆるパナウソスと政治にたずさわる所謂ポリテスの間は全く切り離されてしまふ。クライステネスのデモクラシーもつまりこうしたものであつた。そのデモクラシーは全人類のデモクラシーではなく、奴隷や無権被護民をのぞいた支配市民のデモクラシーであつた。政権は完全な市民権をもつた五万の成年（十八才以上）男子の手におちた。しかもアテネの生活は人口の約半数を占める奴隷の労働に依存していたのだ。

アテネに対しスパルタは前七世紀の後半に騎士に対する歩兵の擡頭があつて、社会的な動搖はあつたが、なお騎士は優勢であつた。しかし土地所有貴族はヘロットに貢納を課せしペリオイコイを支配していた。この点に関する限り、本質的な差異はなかつた。ポリスを形成せる少数の人々がギリシヤの市民であり、彼等は農民の生活から自己を解放したが、こ

これは物質生産のための奴隸の使用を前提としていた。そこで人間は神の如く生きる市民と家畜の如く生きる奴隸とに分裂したのである。

もともと太初は民族的平等の社会であつたろうが、やがて貴族的不平等となり、それには次第にまた平等化せんとの努力がなされる。しかもその代りに民族的に相異なる極度に異質的な奴隸層を持つに至つたのである。その奴隸もはや族内奴隸 intratribal slave ではなく、族外奴隸 extratribal slave になつてしまふ。その極大なる差異の故に、上層者は奴隸に対し、不動の威光 prestige をもつに至る。威光は了解の欠如から生れるものであつて、その差異の大なるため、そしてその行為様式があまりにも違つたため、勢力は威光となり、その支配は絶対となる。奴隸の方は屈服されることによつて生活動力を失ひ、自己の無力感 Ohnmachtgefühl が成立し、反抗意欲が抑止され、従順となる。奴隸的卑屈感である。ギリシヤに於てはローマの如き奴隸叛乱は認められない。

アテネとスパルタとは、いろいろの点に於て対照的であつたが、共同の敵ペルシヤに対しては提携し、これを駆逐することが出来た。ペルシヤ戦争の勝利はアテネに自覚をもたらし、ペリクレス (Pericles) の指導下にこの民主主義は劃期的に發展した。この制度は前五世紀の中にスパルタをのぞいた、全ヘラスに普及する。この民主的傾向はつまり海岸に於ける起伏常なき『海の民家』の放縦であり、商工が優位し、海洋へ傾斜せることを示す。華麗なるイオニア風俗がアテネに拡がり、デイオニススの祭りは狂騒欲喜が年と共に加わり、三日三晩、饗宴と歌と女神への祈りという名の下に狂気の如く興奮せる踊りをもつて、不断の喧噪と欲喜の陶酔がくりひろげられる。それは無制限なる淫猥であり、もはや天真爛

漫たる農民的性格のものではない。それは農民のみの参加するものではなく、商工者も闖入する廢頹的な享樂であつた。かくて爛熟せる古典古代は狂い咲く。それはペロポネス戦役までつづいたわけだ。

前四世紀に於て、一度は文化の彩色を去つて、原始的要素に還歸すべしとの要望が出ている。スパルタの古制が典型として提唱された。ペルシャ戦役に於てスパルタ風に長髪をちぢらせ、スパルタ風の赤靴、そしてスポーツと拳闘が流行したこともあつた。しかしこれはあまりなるイオニア化に対するひとときの反抗たるにすぎない。たとえ暫時はアテネ的商業資本がスパルタ的自然經濟に引きもどされることがあつても、所詮、それは主流たる流れゆきではない。それは僅かに農民の後援をたのむ地主階級の反動的抗議にすぎなかつた。既にしてディオニソスの礼拜にアポロ神がはいつて来ているではないか。海洋と商工への志向、それへの傾斜はあまりにも進みすぎていた。アリストテレスが穩健中正なる農民を中堅とする理想国を夢見たのも、つまりはこの様な時代を嘆いて、イデアを表明せるものに外ならない。あまりなるイオニア化に対しては、よし否定の声があげられるにしても、進み行く水の流れに抗すことは出来ないではないか。

恰かもよしアテネはヘラス最強の海軍を擁し、デロス Delos 同盟の盟主として多数のポリスより同盟への贖出金 *phoros* はアテナイへの貢納と化し、その豊かなる財政は民主政の徹底を容易にする。同盟の倉庫はデロス島よりアテナイに移される。いまやアテネはペロポネス半島を除く全ヘラスを支配する大勢力となり、絶對的な指導權を握つてしまふ。史家の所謂アツチカ帝国である。『領域ある都市』 *a city with its territory* はいまや大帝国 *Great Empire* たるの性格をもとうとするに至る。それはつまり商工業と植民活動と奴隸制とを基盤として初めて可能だつたのである。ペ

リクレスはアテネと外港ピラエウス Piraeus とを結ぶ大城壁を構築し、まだデロス同盟の莫大な積立金を流用して市を再建し、アクロポリスはパンテノン Pantheon の大神殿をたて、全市を大理石で飾つてヘラス最美の都市とした。

而も問題は單にアツチカ内部に於ける農民と商工、農耕的と商工的の対立ではなくなつていた。スパルタの代表するドリア的なものとアテネを盟主とするイオニア的なものの対立であり、この二つの対立は宿命的に展開される。アテネを盟主とするデロス同盟とスパルタの支配するペロポネス同盟とに分れ、ヘラスは数十年間相剋の図を現出する。

しかも最早アテネは産業都市というよりもピラエウス港をひかえて、奢侈的な消費都市になつていたし、既にして全ヘラスを指導すべき地位になかつた。商工的に対し農耕的比重を失つたアテネはペロポネススの戦に破れ、デロス同盟は解放されてしまう。海上帝国の崩壊である。しかも戦争に勝利を得たスパルタにも変化があつた。既にスパルタには外征の結果として、戦利品の獲得があり、これまで法的規定によりて貴金屬の所有を禁止されていた市民間にも貨幣財産上の著しい差別が生じて来た。これはペロポネスス戦役の勝利の結果でもあつた。前四世紀の初めにはスパルタ社会の鉄則たるクレイロスの自由処分禁止を弛めざるを得ざるに至つた。ここにも驚くべき貧富の対立があつたわけだ。

こうした事情を序曲としてヘラスは凋落せねばならなくなる。本来 a city with its territory たるべきものは Great Empire たり得ない。ポリス国家は超ポリスとなつた場合、自殺をとげざるを得ない。ポリス社会はポリスなるが故に意味をもつ。いかに同盟しても固ポリスの精神はくずれない。隣保同盟 Amphiktyonia も、かのオリンピアの祭典、競技も政治的拘束割をもたなかつた。ポリスは相かわらず孤立し、嫉視し、排斥し争闘した。統一への代りに多様性への努力

がなされた。寧ろ無数のポリスの併立にギリシヤの特徴があつたわけだ。ローマのようにたゞ一つのポリスたるローマに統一されることはなかつたのである。元来ポリスは内部に対する自治 (autonomia) と外部に対する自由 (eleutheria) を不可欠の要件とする。しかしこの外部に対する各ポリスの自由は結局統一をさまざまたげたわけだ。かくて遂に外部の野蛮の強力に対して協同して防禦することが出来ず、衰退して行つたのである。

その衰頹の原因は色々あろう。しかしそれは何よりもそれがよつてもつて培かれていた奴隸制度そのものの内に原因があつたのだ。ギリシヤ都市国家は所謂古代的デモクラシーを特徴とし、市民・自由民は自由をもつたが、その支配下に尨大なる奴隸と無権利なる被護民とがいた。初め市民・自由民がたえず階級分化をしながら、奴隸制農業と都市的職場に労働を保証し提供した。しかし、もしも国家がその自由民・市民の没落を防ぎ、その特権を保護しようとするならば、そしてその奴隸が族内的なものから族外的なものに切りかえられるなれば、常に後進的周匪民族を征服する外はない。内的矛盾を外に転換するより外に手がないのだ。しかももしこの征服戦争を継続し得ないとするならば、奴隸の供給はとまらざるを得ない。而も既にして農耕的要素を失い、あまりにも商工化し、廢類的となれるギリシヤは海外に志向しても、征服と発展に及ぶまでの勢力をもちあわさざるに至る。ギリシヤがポリスを群立せしめて、遂にローマの如き大帝国にまで伸びなかつた秘密の鍵はここにあつたのである。

本稿は筆者の西洋経済史講義案の一部であつて、もとより積極的な研究ではない。従つてその参照書目や一ち一ちの引用は煩なるため行わなかつた。ここにその主要なるもの二、三を列記しておく。

Toutain, J. L'Économie antique, 1927. (The Economic Life of the Ancient World 1930)

Glotz, G. Le travail dans la Grèce ancienne, 1920. (Ancient Greece at Work.)

Michell, H. The Economics of Ancient Greece, 1940

舟越康壽訳、ブレンタノ、欧羅巴古代經濟史概説

マルクス草稿、飯田眞一訳、資本制生産に先行する諸形態

平野義太郎訳、ウィットフオーゲル、東洋的社会の理論